

時の旅人

——堀越さんを送る——

小倉芳彦

「こうした方が香りが引き立つのですよ」と、蒸籠の角に載った山葵かまひをもりそばの中に混ぜ込む。鎌倉駅に近い小町通の蕎麦屋の一角で、主は三人の遠来の客に契めて蕎麦を賞味する。客はドイツ史の木村靖二さん、台湾出身のアジア研究者の戴國輝さんタイクワンキイ、それに私を加えての三人。歳末近い午後の鎌倉散策を主の堀越さんから誘われたのである。

腹捲えを済ませてから、タクシーで一先ず二階堂の堀越邸に寄って手荷物を下ろす。それからは主の案内で、今は空き家の華頂宮邸前を通って浄妙寺へ。竹林の見事な報国寺で一服し、庭内の山菜さんさいの樹と「はじめかみ」の關係についてしばし清談を交わす。宅間ヶ谷を登り詰めると新開発の浄明寺住宅地へ出る。また坂を下って岩の崩れ落ちそうな釈迦堂切通しを抜け、杉本寺に寄ってから主の邸に戻った。

当日のスナップ写真を眺め返すと、戴さんはベージュのジャンパーに紺のチェックのマフラー、木村さんはベージュの防寒ジャケット、案内の主はグリーン系？の厚手のハーフコート、私だけがオールドクスな紺の長コートで、私と主とはハットを被っている。

主の邸での酒宴は十時頃まで続く。床の間の前に座す戴さんは、

せり出したお腹を抱えて豪放なる將軍の如く、隣席に畏まった私は忠実なる参謀に似たり。時は一九八八年十二月二十六日。以来既に二十年近い月日が過ぎ、台湾に戻った戴さんは今や亡い。

私にとっては主の二階堂邸訪問がこれが最初ではなかった。手帳を調べるとそれより溯ること六年、一九八二年の五月三十日、学習院教職員の釣クラブ「桜鱗会」の誘いで、江ノ島腰越港から出船。

この日の釣果はこれまた手帳によると、キス一、メゴチ三、その他といったところで、夕方早く現地で解散となった。このまま帰宅するのも味気なく、ふと思いついて、「ブルーローニユの燻製ニシン」ならぬ相模湾のキス少々をこれから持参してよろしいかと二階堂へ電話した。洋包丁一本で小型のキスを捌く手並みはお目につけたが、さぞかし御迷惑であつたらう。

さらに溯ると、二階堂邸の完成間もなくの頃、史学科コレガ一同がお披露目の招きにあずかったのを思い出す。シンプルな大屋根の大胆な設計でした。庭の手入れもまだ行き届きませんと節子夫人は申されたが、当日料理に供された自家産の隼人瓜を、後刻拙宅まで一箱送って下さったのには恐縮した。旦那様の刊行した大著の包装に、色鮮やかな記念切手を一面に貼り込んでその都度発送されるの

も夫人の分担と見た。仏文の大学院に入学を拒否された失意の貧書生が、突然の自然気胸で倒れた入院先に、時間講師を勤めていた都立高校の女子生徒が見舞いにやって来た。「どうでもよいことです、それが家内です」と『わがヴィヨン』の著者は逃げておられる。

話は変わる。『史記』の「刺客列伝」の論贊には、太史公が游侠のドン郭解を見かけた印象を、「その姿や顔は並の人にも及ばない。話すことにも格別大したことはなかった」と述べている。この「太史公」が司馬遷本人か、それとも父の司馬談なのか意見の別れるところだか、二千年前の或る時、恐らく茂陵の街角で彼等の出遇いがあったことは文字に残っている。五百年前の或る日、パリはモービュエの水場で、一老市民と無頼の若者ヴィヨンとが背中と背中をぶつけ合ったとは、誰も記録に止めてくれない。しかしその図柄は〈時の旅人〉堀越さんにとっては、現前のものである。「わたしは自分の目で読み、自分の頭で考えたことしか書きたくない」と書く旅人は、その逆に、脳中に浮かんだイメージをあくまで文字を使い委曲を尽くして描き切ろうとする。従ってその文体はモウロウ体、くねくね体とならざるを得ぬ。素直な読者がとまどっても敢えて、である。

父親譲りの杉綾織の外套を着込み、髪はボサボサの長髪、櫛も通さず、伏し目がちに、玉川上水沿いの三鷹に住む高校時代の師・浅野長孝のもとへ通う少年は、今は史学科の教授に辿り着いている。何が少年をそこまで運ばせたのか、少年と教授に通底するものは何かを、彼は執拗に追い求める。放浪学生ぐらしの中でホイジンガの

『ホモ・ルーデンス』に遭遇し、やがて『中世の秋』の世界にはまり込む。かくて彼は仏文でも美術でもない西洋中世史家となった。アベラールの詩を引いて、「若者はついにパリに着いた」と彼は書く。だが彼にはそれが終着駅ではなかった。『中世の秋』の中でヴィオンを読むだけでは満足できぬ。と言って文献的、言語学的に精緻なヴィヨン研究は耐えがたい。そこで彼はパリの、ストックホルムのヴィヨン詩写本をわれとわが目で追い求める。外挿法によらず、「まずは『ヴィヨン遺言詩』にさがせ！これがわたしの合言葉」だと彼は言う。『形見分けの歌』、『遺言の歌』上中下、計四冊の『遺言詩注釈Ⅰ〜Ⅳ』がその成果である。

屈折した探究のプロセスを、比較的美直な聴き手や読者に伝えるために、もどかしさが饒舌となり、それに含羞が重なる。史学科教員の溜り場である共同研究室、中央にずしりと据えられた長机を八、九名分の教員の椅子が取り囲み、会議をしたり昼食を食べたり、そして何より学年末には卒論・修論の口述試験の場となったが、堀越さんと私は最初から隣り合わせの席だった。とりとめのない噂話や冗談を言い合っても、今思い返すと、二人の間で生真面目に歴史学について論じ合うことは殆ど無かった。いつかE・H・カー『歴史とは何か』を推薦書の一つに挙げたら、あまり賛意を表されなかった記憶がある。「史学概論」の授業を担当し続けられた堀越さんから見れば、私などのキャパシティはとうにお見通しだったに違いない。やがて史学科教授の席を離れる堀越さんは、一層自由に〈時の旅人〉の本領を発揮されるだろう。刮目して待つべし。